

大阪商業大学学術情報リポジトリ

大学不適応を支援するための入学時チェックリスト
の開発ー高校生活までの困り感から教育相談、学生
相談の在り方考えるー

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2018-05-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐野, 茂, 中村, 宥吾, SANO, Shigeru, NAKAMURA, Yugo メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/540

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



大学不適應を支援するための 入学時チェックリストの開発

— 高校生活までの困り感から教育相談、学生相談の在り方を考える

佐 野 茂
中 村 宥 吾

- I はじめに：大学不適應を支援するための新しいチェックリスト作成の目的
- II 方法：大学不適應を支援するための新しいチェックリスト作成の方法
- III 結果：高校、大学生活等での困り内容の聞き書きの要約
- IV 考察：新しい学生支援チェックリストと教育相談、学生相談の再考

I はじめに：大学不適應を支援するための新しいチェックリスト作成の目的

今日多くの大学において、新入生が入学後スムーズに学生生活に順応できることを目的として、「UPI（University Personality Inventory: 大学生精神保健テスト）」等を用いて入学時の精神健康度の把握を行っている。UPIは精神健康に関する60項目の質問文から成る自記式のチェックリストである。回答は○か×の2件法であり、採点は○を1点、×を0点として加算合計し、この合計をUPI得点とする。UPI得点は値が高ければ高いほどストレスが高いことになる。A学生相談室においても、UPI得点が30点以上およびKey項目¹⁾（項目25, 34, 49, 55）に該当する学生を対象に4～5月以降に希望者のみ面談を行っている。このような対象者に面談を行うと、「今は楽しくやれています」「特に問題ないです」など大学にスムーズに適應できているという報告があり、UPI得点の高値が一過性であったと考えられるケースが少なくない。

一方でA学生相談室への来談経路は、上記のUPIの呼び出し以外にも、自主来室、保護者との同伴、他課の職員や教員からの紹介など様々である。このようなケースの中には、「本人の困り感は低いが、周囲が本人の行動を理解できず対処に困っている」、「困り感はあるが、何につまずいているのか本人自身もよく分っていない」、「他者とのコミュニケーションの取り方や距離感が極端に分からない」といったメタ認知や他者の心の理解に問題を抱えた主訴が多く見られる。面談を進めていくと、主訴の背景には近年大きく話題として取り上げられる発達特性の問題が見え隠れすることがあり、UPIの対象者とは様相が異なる側面がある。このため、年々、UPI得点の結果だけで支援対象を把握することが難しくなっ

1) key項目とは「食欲がない」「自分の過去や家庭は不幸である」「不眠がちである」「死にたくなる」。

いるのではないかと考えている。この難しさの要因の一つとしては「UPI」の質問項目の多くは心身の状態像や対人関係に関する事で占められていることがあげられる。例えば、精神面での困り感がありながらも、打ち込める部活や大学内の親しい友人の存在で、大学生活を楽しめているという学生がいるとする。この場合、「UPI」では問題ありと判定されるが、大学生活は不適応状態に陥らない。一方、読み書きに課題を抱えており、精神症状はない学生がいるとする。この場合、「UPI」では問題無しとなる。しかし大学の講義形式は高校までの授業とは異なり、教官の話を聞きながら自分自身で判断し、適宜ノートに書き写すことが基本になるため、学生自身には大きな負担になる。そのため単位取得へのストレスは一般学生や心理的課題を持つ学生よりも相当強いものになると考えられる。

以上のような現状から、学生に対して多面的な支援をはかるには、入学時支援チェックリストに、今後心身の状態像に関する質問項目だけでなく、修学に関する内容も含まれた大学生活全般に関連したものの方が学生を包括的に理解でき、大学での適応状態の予測度が高まると考える。また、この新しい支援チェックリストの考案作業は、今後の学校現場での教育相談の在り方を再考する一助にもなると考える。

このような経緯から、本研究の目的は、①「UPI」質問項目の再精査を基にして、修学をはじめとした大学生活全般で、困り度が予測できるような包括的な質問項目を作成すること、②高校までの修学状況をヒアリングする中から、高校までの教育相談の在り方や入学後の学生相談の進め方についても再考することである。今回はこの目的の前段階として、まずチェックリストが主観的にどのように受け止められ、それがデータにどのように現れているかの分析を、大学生活において困り感があると思える学生から、面接調査を実施し質的分析をこころみた。

Ⅱ 大学不適応を支援するための新しいチェックリスト作成の方法

1 情報提供者の選定

A 大学学生相談室利用者で、「UPI」の面接対象に該当しなかったが、入学後学生生活で困り感を抱いていると考えられる学生に研究の目的、個人情報とデータの取り扱い等、研究上の倫理についての説明を図1の同意書を用い説明し、同意を得て署名してもらったものを対象とした。

2 聞き取りの方法と内容

UPI 得点の変動、現状を確認するために「UPI」を再度受検してもらい、その回答について、困り具合の程度や質問項目に対する感想を求める。学業面に関しては「困り具合に関するセルフチェックリスト」²⁾を参照してチェックリストを作成した(図2)。このチェックリストでは修学面を質問項目番号1～23、対人関係面を質問項目番号24～34、親子関係面を質問項目番号35～38、社会参加面(アルバイト等)を項目番号44～46で測る。修学面の

2) 国立特別支援教育総合研究 2007『発達障害のある学生支援ケースブック』 ジアース教育新社。

研究参加者の方へ

研究の目的

この研究では、学生生活および学習面を中心とした発達的な課題の聴き取りや検査を実施することにより大学生向けのスクリーニングテストの開発を目的としています。ご協力いただける場合には、参加同意書に署名をお願いします。

個人情報とデータの取り扱い

取得したデータや個人情報は、研究目的以外には使用しません。データには匿名化をしますので、研究発表する際も個人情報情報は守秘されます。データの保管には万全を期し外部へは漏洩しません。この保管データは、研究が終了してから5年後までに破壊します。

実験対象者の権利について

この研究に参加するか否かは自由意志で決定してください。また、一度同意した後でいつでも同意を取り消すことができ、それによる不利益はありません。但し、取り消し要求された時点で公表済みの解析結果がある場合は、このデータを破壊できませんのでご承知おきください。

研究に参加することによる利益と不利益

参加されなくても不利益を受けることは全くありません。在学生に対しては履修利目の成績評価とは関係ありません。

(研究者)

〒577-8505 大阪府..... TEL 06.....
A 大学 学生相談室
佐野 茂 中村 有吾

私は、以上の説明を理解し、本研究に参加することに同意します。

所属：.....氏 名：.....
.....年 月 日

図 1 研究参加に関する同意書

以下の質問項目を読み、あてはまるものには○をあてはまらないものには×をつけてください。

質 問 項 目							
1	誤字、脱字が多い	13	実験や実習に参加することに苦痛を感じる	25	クラスメート等とトラブルになることが多い	37	周りから孤立していると感じる
2	手書きで文章を書くのがとても遅い、または文字を上手に書くことができない	14	ざわざわした教室にいるのは耐えられない	26	約束を守れなかったり、忘れられたりすることが多い	38	将来のことを考えると不安だ
3	文章を読むことが苦手だ	15	シラバスと違う授業だったり、突然予定が変更されると納得できない	27	人と会話することが苦手だ	39	学内に友達がいる
4	本を読むのに時間がかかる	16	整理整頓が苦手だ	28	思い込みが激しいとよく人から言われる	40	学外に友達がいる
5	計算が苦手だ	17	諸手続の期日を忘れてしまうことが多い	29	他の人が考えていることを理解するのが苦手だ	41	親とよく話す
6	講義を聴きながらノートを取ることができない	18	物忘れ、紛失物が多い	30	周囲の人が言っていることをうまく理解していないように感じる	42	親と仲が良い
7	教員の指示を聞き逃すことが多い	19	約束した時間に遅れることが多い	31	納得するまで質問する輩、人から「いい」とよく言われる	43	親の期待が高い
8	レポートや宿題を期日までに仕上げられないことが多い	20	掲示物や配布物に気がつかない、もしくは忘れられていることが多い	32	クラスメートの顔と名前を一致させることがなかなかできない	44	アルバイトをしている
9	90分集中して授業を受けることが苦痛である	21	学業、サークル、アルバイトなどから何を優先すべきかを判断することが難しい	33	カッとしやすい	45	ボランティアなど、地域のかかわることをしている
10	聞く人・読む人が分かりやすいように考えを整理して話したり、文章にしたりすることが苦手だ	22	二つ以上の作業を同時にこなそうとするとすぐ混乱する	34	衝動的に物品を壊すことがある	46	外に遊びに出掛けることがある
11	どんな科目を履修すればよいのかが分からない	23	授業と授業の間で時間ができると時間をつぶすのに困る	35	自分はダメな人間だと思いがちである		
12	自分の意見を交えてレポートを書くことが苦手だ	24	衝動買いの傾向がある	36	気分が沈みがちである		

図 2 学業面のチェックリスト

チェックリストにも回答してもらい、UPIと同様に困り具合の程度や質問項目に対する感想を求める。合わせて、チェックリストに影響を与えている要因を把握するために簡単な生活歴、困り感の解消のための環境設定の条件を聴き取る。聞き取りの時間は1回1時間程度、回数は一人2回以上の聞き取りを実施する。調査時期 平成27年4月より平成28年3月
対象人数34名

Ⅲ 結果：困り内容等の聞き書きの要約

1 聞き書きの主たる内容

聞き取った情報を、1.高校・大学生活での困り内容等(心理的課題も含めて)、2.「UPI」再試行からのヒアリング、3.「困り具合に関するセルフチェックリスト」からのヒアリング、4.学修等での大学への要望に4類型し、そこでの要約を以下列記する。また、紙幅の都合もあり、今回は代表的な報告のみを報告する。なお「○」は「該当する」「×」は「該当しない」の意として表記した。

2 聞き書きの要約

《#1》

1 高校・大学生活での困り内容等(心理的課題も含めて)

大学生活を送るにあたり、若干の不本意入学のところがあつた。不真面目な学生に対してイライラ感がある。

2 「UPI」再試行からのヒアリング

Key項目は問題なく、UPI得点は12。「将来のことを心配しすぎる」「気疲れする」「なんとなく不安である」「何事もためらいがちである」「とりこし苦勞をする」「繰り返し確かめないと苦しい」「気分が波がありすぎる」に「○」がついている。ヒアリングからも、漠然とした軽い不安感や、とらわれ感の強さは感じられる。UPI得点は低い、不安傾向も強いように思える。その意味で「おおむね体の調子がよい」「おおむね活動的」「気分はおおむね良好」が「○」になっているが額面通りには受け止められない。

3 「困り具合に関するセルフチェックリスト」からのヒアリング

全般的にはチェックされた項目は少ないが、「計算が苦手だ」「整理整頓が苦手」「納得するまで質問する等、人からしつこいとよく言われる」「自分はダメな人間だと思いがちである」「周りから孤立していると感じる」「将来のことを考えると不安だ」が「○」でUPIでの回答を裏付ける印象となっている。

4 学修過程全般での要望等

動機づけの高い熱心な学生とそうでない学生をある程度分けて教育してほしい。

《#2》

1 高校・大学生活での困り内容等(心理的課題も含めて)

小学生の時から食行動に不安があり、それが原因で不登校経験がある。学修面よりも対人関係面、社会参加面で消極的な行動があり、困り感がある。そのため、宿泊研修等集団行動

への参加やゼミコンパ等での会食場面への参加が難しい。また、一步踏み込んだ友人関係が形成しづらくなる。将来における組織での仕事への不安がつる。

2 「UPI」再試行からのヒアリングから

UPI 得点は25。Key 項目の「死にたい」は「○」。その理由としては、まじめに生き、生活したいのだがそれが難しく、できない自分について「死にたい」という表現になる。「食欲がない」には「×」だが、正確には社会的場面では食行動ができないということになる。

「汚れが気になって困る」「こだわりすぎる」「つまらぬ考えがとれない」は「○」で、ヒアリングからもこだわり感の強さはうかがえる。「つきあいがきらいである」が「○」だが、これは会食にたいする不安感からの回答で、人全般への不信感からのものではない。

3 「困り具合に関するセルフチェックリスト」からのヒアリング

「誤字、脱字が多い」「手書きで文字を書くのがとても遅い、または文字を上手に書くことができない」「本を読むのに時間がかかる」「計算が苦手だ」が「○」で、UPI 得点、情報提供者の印象像からは全く見えてこないものである。実際には表現力もあり、文章作成能力もきわめて高いが、こだわり感の強さなどから、現実に学修に時間がかってしまっている、というところが正確なところかと考える。本人も単時間でのレポート作成には自信がないという意味での回答、とのこと。「周囲の人が言っていることをうまく理解していないように感じる」は「○」だが、回答するには難しい項目であった、とのこと。

4 学修過程全般での要望等

宿泊研修等は行きたいが、参加が困難であることも理解してほしい。

＜# 3＞

1 高校・大学生活での困り内容等（心理的課題も含めて）

学修面よりも友人関係形成においてスムーズにいかないことが多い。授業形態では発表形式のものに少し抵抗感がある。

2 「UPI」再試行からのヒアリング

Key 項目は「食欲がない」「不眠がちである」が「○」。UPI 得点は39。Key 項目の「自分の過去や家庭は不幸である」「死にたくなる」は「×」だが、UPI 得点の高さから全般的な生きづらさ、不安、気分の波、身体的不調は予測できる。実際のヒアリングでの印象や大学生活全般の実態を聞いても、UPI 得点が反映されたものであった。

3 「困り具合に関するセルフチェックリスト」からのヒアリング

学修への困難さや困り度への強さが非常に高い結果が出ており、UPI だけではわからない学修全般に対する不安、困難さがうかがえる。「自分の意見を交えてレポートを書くことが苦手だ」が「○」であり、その背景には自分の意見というものが何かわからないためレポートが書けないことと、ほどほどに仕上げるのが困難である、と主体性がキーワードになる悩みもある。「学業、サークル、アルバイトなどから何を優先すべきかを判断することが難しい」が「○」で、先を見通して瞬時に判断していくことの困難さがうかがえる。「他の人が考えていることを理解するのが苦手だ」「周囲の人が言っていることをうまく理解していないように感じる」「納得するまで質問する等、人からしつこいと言われる」が「○」で、コミュニケーションの困難さがあり、実際の生活場面でも消極的な場面がみられ

る。「実験や実習に参加することに苦痛を感じる」が○で、参加したいが、ついていけないかの不安が先にたってしまい消極的な大学生活になっている。

4 学修過程全般での要望等

コミュニケーションが苦手なため、演習はできるだけ少人数で自分のことを理解してくれている教員や仲間のクラスがあるといい。

《# 4》

1 高校・大学生活での困り内容等（心理的課題も含めて）

大学に在籍していることが苦痛。ゼミ等で自分がなぜここに座っているのかよくわからず、とにかく大学に通学するのが辛かった。大学に友人はいるが、こちらから話しかけることができない。

2 「UPI」再試行からのヒアリング

Key 項目は「不眠がちである」だけが「○」。UPI 得点は18。「人にあいたくない」「やる気が出てこない」「悲観的になる」「気分に波がありすぎる」「いらいらしやすい」「おこりっぽい」「つきあいが嫌いである」が「○」で、実際気分に波がある。若干の不安傾向があり、対人関係を結ぶのが難しく、そのことでイライラ感が増幅する。「おおむね人間関係は良い」は「○」だが、ここでは元来友人は少なく、小さなグループの中での人間関係に限定される。

3 『困り具合に関するセルフチェックリスト』からのヒアリング

「文字を読むことが苦手だ」「レポートや宿題を期日までに仕上げられないことが多い」「90分集中して授業を受けることが苦痛である」「聞く人・読む人が分かりやすいように考えを整理して話したり、文章にしたりすることが苦手だ」「自分の意見を交えてレポートを書くことが苦手だ」が「○」。UPI では推察できない学修面での困難さが実際にある。

4 学修過程全般での要望等

元々、大学に行くことに消極的な人や興味が限定的な人に、なにか少しでも行くことができるよう（行きやすいよう）にしてほしい。もし「大学をやめたいですか？」等の直接的な質問を受けても上手く表現することができない。質問内容に入れてもあまり参考にはならないと思う、とのこと。

《# 5》

1 高校・大学生活での困り内容等（心理的課題も含めて）

入学したばかりは出席しなくても単位が取れるだろうと甘く考えていた。また、授業を詰め込み過ぎてしまい、逆に学校に行くことが嫌になった。2～3年生ではバイトに従事しすぎて、部活・バイト・学業の両立が難しくなり、単位取得が芳しくなかった。卒業が難しくなっている。

2 「UPI」再試行からのヒアリング

Key 項目は該当なし。UPI 得点は28。人に上手く物事を伝えることが苦手なことから緊張しやすいため「人前が異常に苦手である」「時々声がふるえたりする」「他人に悪くとられやすい」「つきあいが嫌いである」「ひけ目を感じる」に「○」。就職が決まっておらずそれに

対する不安が高いため「将来のことを心配する」「悲觀的になる」「考えがまとまらない」「記憶力が低下している」に「○」。本人の状況を反映した結果となっていた。UPIの質問項目に対しては、「排尿や性器のことが気になる」は排尿と性器は1つの質問文にまとめるのはおかしい、「とりこし苦労をする」の「とりこし苦労」の意味が分からない、ということ述べた。

3 『困り具合に関するセルフチェックリスト』からのヒアリング

28点。友達は学内、学外に存在し、親子関係も良好。学外活動もしている。修学関係では「講義を聴きながらノートを取ることができない」、「教員の指示を聞き逃すことが多い」、「整理整頓が苦手だ」、「諸手続きの期日を忘れてしまうことが多い」、「物忘れ、紛失物が多い」、「約束した時間に遅れることが多い」、「学業、サークル、アルバイトなどから何を優先すべきかを判断することが難しい」といった項目に「○」をつけており、注意の維持、優先順位をつけることや物事を組み立てることの難しさが反映されていた。また「レポート」を提出すべき課題である、と3年生になるまで理解していなかった。このような結果は本人の大学生活の困り内容と直接的な関連があると考えられ、UPIからは把握できない側面であった。質問項目全般に対しては、理解できない項目はない、ということであった。

4 学修過程全般での大学への要望等

レポートやテストに関する期日や内容の情報を授業中に伝えるときは、もう少しメリハリのある言い方（今からテストのことを言いますなど）をしてくれると自分に取っては分かりやすくなると思う。

＜# 6＞

1 高校・大学生活での困り内容等（心理的課題も含めて）

大学生になり、積極的に勉強をしたり、友達を作るために話しかけたりしなければならぬと思っている。しかし、実際はほとんど出来ていない。親や周囲の促しがないと動くことができず、受け身的になってしまう。そのため、学内で話すような友達はいない。

2 「UPI」再試行からのヒアリング

Key項目は「自分の過去や家庭は不幸である」のみ。UPI得点は19。「人に会いたくない」、「人前が異常に苦手である」、「時々声がふるえたりする」、「他人に相手をされぬ」に「○」。インタビューアは聴き取りをしていて疎通性に問題を感じなかったが、自分が話すとは話は盛り上がらないとコミュニケーションに困難を感じている。「やる気がでない」、「悲觀的になる」、「考えがまとまらない」、「根気が続かない」、「決断力がない」、「人に頼りすぎる」、「ものごとに自信をもてない」に「○」。やる気が出ないことや根気が続かない理由を考えるが、考えてもよく分からなくなり、決めることができない。そのため、親から指示されてしまうことが多くなる。また、指示を仰がないと行動がしにくい。物事に対して主体的に行動できないので、自信を持つことも出来にくい。Key項目の該当項目は親から口煩く指示されているためとのことだった。質問項目に対しては特に分からない項目はなかった。

3 『困り具合に関するセルフチェックリスト』からのヒアリング

26点。「本を読むのに時間がかかる」、「計算が苦手だ」、「講義を聞きながらノートを取る

ことができない」、「教員の指示を聞き逃すことが多い」、「レポートや宿題を期日までに仕上げられないことが多い」といった基本的な修学スキルに該当する項目に「○」。書き取りが上手くできないため、正直、今まで学校に通っていて理解出来たという体験がない。「整理整頓が苦手だ」、「諸手続きの期日を忘れてしまうことが多い」、「物忘れ、紛失物が多い」、「掲示物や配布物に気がつかない」に「○」。明確に指示を出している先生であれば、課題内容が理解できるが、そうでない場合は聞き逃してしまうことがよくある。このようなことから、様々な刺激の中からある対象を選択し、その対象に対して適切に注意を向けることが難しいことが理解できる。また、「約束した時間に遅れることが多い」、「衝動買いの傾向がある」に「○」をつけており、物事の先を見通して計画的に予定を組み立てることが不得意と推測できる。そのため、様々な物事を積み上げることが出来にくく、「自分はダメな人間だ」と思いがちである」と自己肯定感の低さに繋がっているのではないかと考えられる。質問項目に対しては特に分からない項目はないとのことであった。

4 学修過程全般での大学への要望等 思い浮かばない。

＜＃7＞

1 高校・大学生活での困り内容等（心理的課題も含めて）

3 回生になったが、今でも単位が順調に取得できるか不安がある。試験前になると今でも出来るかどうか不安になり、物事が手につかないくらいになる。

2 「UPI」再試行からのヒアリング

Key 項目は該当なし。UPI 得点は21点。「将来のことを心配しすぎる」、「悲観になる」、「考えがまとまらない」、「決断力がない」、「なんとなく不安である」、「ものごとに自信をもてない」、「こだわりすぎる」、「つまらぬ考えがとれない」に「○」。不安が高く、情緒が安定し難いことが分かり、大学生活での困り内容との関連が推測される。質問項目に対しては「悲観的」、「気分が波がある」、「ためらいがち」、「気をまわす」、「とりこし苦労」、「つまらぬ考え」等の言葉の意味が分からず、抽象的な言葉の理解が難しいようであった。

3 『困り具合に関するセルフチェックリスト』からのヒアリング

18点。「どんな科目を履修すればよいのかが分からない」、「自分の意見を交えてレポートを書く事が苦手だ」、「シラバスと違う授業であったり、突然予定が変更されると納得できない」、「授業と授業の間で時間ができると時間をつぶすのに困る」、に「○」。選択肢が多い自由度の高い場面や場面の急な変更に対応できにくい。「周囲の人が言っていることを理解するのが苦手だ」に「○」。親から怒られることが度々あるが、なぜ怒られているのか理解できないことが多いとのことで、他者理解や推察力の困難性があると考えられる。質問項目に対しては、意味が分からない項目はなかったとのこと。

4 学修過程全般での大学への要望等

「台風情報に関しては詳細をもっと HP にて知らせて欲しい。今の情報提供では、行った方がよいのかそうでないのか判断できないことが多い」とのこと。このような要望は、情報が極めて具体的でないと判断がしにくいためであると推測され、『困り度セルフチェックリスト』で得られた知見と合致すると考えられる。

Ⅳ 考察：新しい学生支援チェックリストの作成

1 『UPI』、『困り具合に関するセルフチェックリスト』の聞き取りから

(1) 回答形式、教示方法について

回答形式に難しさを唱える被験者がいた。双方のチェックリストともに、回答形式は「○」か「×」の2件法であり、明確に「○」、「×」に判断できないという意見が多かった。2件法は方法論として問題はないが、決断に時間がかかる被験者にとっては、この決断ができないことが大学生活の困り度と関係してくる。その意味で「どちらともいえない(△)」を入れて3件法にするのは一案である。「どちらともいえない(△)」は中性カテゴリーと呼ばれる。中性カテゴリーがない質問紙は「回答しにくい」「選択できない」ため、欠損値が増えてしまう可能性がある。しかし、日本人は中性カテゴリーに反応することが多く、多くの人が△に回答する傾向があると考えられている³⁾。スクリーニングテストを個人差の測定を目的として使用するならば、このような傾向に配慮して「どちらともいえない(△)」を導入することが必要である。なかなか決められない学生への配慮を考えた場合は、3件法以外に「とても、まあまあ、ふつう、あまり、全然」といった5件法といった形式の採用も、一考する余地があると考ええる。5件法は、2件法、3件法と比較して段階が詳細に分かれているため、被験者から得られる情報が多くなる。しかし、段階が詳細なため、その分回答する被験者への負担は大きくなる。スクリーニングテストは新入生のオリエンテーションの場で実施されるため、実施時間に限りがある。実施時間や問題数とのからみの中での検討課題と考える。

教示内容に関して、「UPI」では回答を「最近1年間の間」という比較的長期的なスパンでの判断が被験者に求められる。一方、「UPI」と類似した心身の健康度を測定するスクリーニングテスト GHQ-30、K-10の教示内容は、それぞれ「この調査はずっと以前のことでなく、2〜3週間前から現在までの状態についての調査です」、「過去30日の間にどれくらいの頻度で次のことがありましたか」と比較的短期的なスパンの判断が求められる。「UPI」は固定化された状態像を、GHQ-30、K-10は比較的最近の状態像を問うていることになる。このように目的に応じて教示を使い分ける必要があると考ええる。

(2) 質問項目、表記方法について

回答結果を改めて、被験者と内容を精査する中で、例えば「1. 食欲がない」という現象でも、よく聞けば、ここ数日たまたま食欲がないだけで普段はふつうにある、といった場合もある。回答方法の教示にあるように、「最近1年間の間にときどき感じたり経験したことのある場合に○」と記載はしていても、実際はその時の状況に左右されて「○」を記載することが多いのでは、と推察する。同様の誤答が「10. 人にあいたくない」「12. やる気がでてこない」「13. 悲観的になる」「14. 考えがまとまらない」「17. 頭痛がする」「22. 気疲れがする」「46. 体がだるい」の項目でも考えられる。この場合、「人に会いたくない」は「人に会いた

3) 小塩真司・西口利文 2007『質問紙調査の手順』、ナカニシヤ出版、47-53頁。

くないことが(多い)」、「やる気が出てこない」は「やる気が出てこないことが(多い)」,といった文言を付加することにより改善可能かと考える。また、教示の表記方法は期間を太字にする、下線を引くなど目につきやすくする工夫が必要である。

質問項目の意味が分かり難いという意見も多く見られた。特に「45. とりこし苦労をする」は「とりこし苦労」の意味を把握している被験者は少なかった。これは「UPI」が1966年の発表以降、質問項目や用語の改変が行われていない影響もあるだろうが、分かりやすい言葉に変換する必要があると考える。困り度セルフチェックの得点が高い被験者は「13. 悲観的になる」、「15. 気分が波がありすぎる」、「39. 何事もためらいがちである」などのような比較的抽象的な意味合いのする質問が分かり難いという意見が見受けられた。一方、『困り具合に関するセルフチェックリスト』の方は質問内容が具体的な行動記述になっているため、質問の意図は分かりやすいという意見が得られた。しかし、「1. 誤字・脱字が多い」に関しては、他人の指摘があれば分かるが、自分では分からないという意見もあった。スクリーニングテストのような質問法では被験者が自覚している部分にしか回答に反映されない。学習面で問題を抱えている学生の中には自分自身の行動特性を自覚していない場合も多く見受けられ、スクリーニングテストに反応しない可能性もあるが、この点は質問紙の限界と考えられる。

(3) 困り具合に関するセルフチェック項目の追加の必要性について

本研究では「UPI」の質問項目だけでなく、『困り具合に関するセルフチェックリスト』を追加して聞き取りを実施した。その必要性について事例を交えて以下検討する。

① 事例1

学生#1の入学時の「UPI」の回答例をみると、Key項目は不眠がちが「○」で、「UPI」得点は23。この得点は健康群とみなされ、本人も結果に関する情報提供を求めているため、支援は提供されないままになるケースである。このケースに『困り具合に関するセルフチェックリスト』を加えると、「誤字、脱字が多い」、「本を読むのに時間がかかる」、「自分の意見を交えてレポートを書くのが苦手だ」が「○」で、学修面での困り度を訊いてみると、苦労していることがうかがえる。また「自分はダメな人間だと思いがちである」、「気分が沈みがちである」に「○」で、このことは学修面でのちょっとしたつまずきや苦労とも関係していることを述べている。UPI得点や項目だけのチェックでは漠然としていた課題が『困り具合に関するセルフチェックリスト』を加えることによってより明確になると考える。

② 事例2

学生#2の入学時のUPI回答をみると、Key項目では「不眠がちである」のみが「○」。UPI得点が24で健康群とみなされるケースである。全般的に対人場面での困り感は推察できるが、一般的には人前が苦手な学生で済まされてしまうケースかと考える。このケースに『困り具合に関するセルフチェックリスト』を加えると、「誤字、脱字が多い」、「どんな科目を履修すればよいのかが分からない」、「ざわざわとした教室にいるのは耐えら

れない」、「整理整頓が苦手だ」、「物忘れ、紛失物が多い」、「掲示物や配布物に気がつかない、もしくは忘れてしまうことが多い」、「学業、サークル、アルバイトなどから何を優先すべきかを判断することが難しい」、「二つ以上の作業を同時にこなそうとするとすぐ混乱する」などに「○」があり、ヒアリングからも課題に対する同時処理のつまずきが日常的に見られることが分かってくる。したがって、入学後の学修場面などで、短時間でまとめあげるレポートや、同時にいくつかの課題をまとめあげて回答するといったことは困難が予測でき、事前の指導があれば大学生生活の困り感も随分緩和されると考える。

③ 事例 3

学生 # 3 の入学時の「UPI」回答をみると、Key 項目は「不眠がちである」が「○」で、UPI 得点が12であるため、UPI の結果では健康群とみなされるケースである。ヒアリングでは快活で語彙も豊富なため、元気で健康的な青年として一般的には捉えられる学生と考えられる。

このケースに『困り具合に関するセルフチェックリスト』を加えると、「誤字、脱字が多い」、「手書きで文字を書くのがとても遅い、または文字を上手に書くことができない」、「講義を聴きながらノートを取ることができない」に「○」。授業内容を書き留めることの困難さ、試験勉強時には何から手をつけてよいか分からないなどの点で困ることが予想できる。この点をヒアリングしてみると、実際ほとんどノートは取ることが出来ていないようであった。また、「教員の指示を聞き逃すことが多い」、「諸手続きの期日を忘れてしまうことが多い」、「提示物や配布物に気がつかない、もしくは忘れてしまうことが多い」に「○」が付いていた。優先順位の高い物事へ注意を維持させることが出来ず、レポートや重要な書類を提出することを認識せずに提出が滞ることが予想できる。実際、1年生のときは単位取得の方法を理解しておらず、レポートを提出できずに単位取得があまり出来ていないようであった。また、「聞く人、読む人がわかりやすいように考えを整理して話したり、文書にしたりすることが苦手だ」に「○」がついていた。このような学生の場合、文字を書く事が苦手なため、レポートをまとめることはさらに高いハードルとなることは予測できる。『困り具合に関するセルフチェックリスト』の結果を加味しながら本人と話しを進めていくと、単位取得の困難さが予測でき、元気で快活という第一印象とは異なる本人の困り感が理解しやすくなる。予め具体的な困り具合が分かっていると、この学生の場合、レポート課題が提出されていないか、もし情報を聞き逃しているのなら先生に質問するように促すなど、具体的な支援がしやすくなると考えられる。

2 新しい学生支援チェックリストの考案と修学上の教育相談、学生相談の再考について

今回のヒアリング結果から考えると、「UPI」に「困り具合に関するセルフチェックリスト」を加えて学生像を見ると、「UPI」だけでは把握が難しかった学修面での、大学生生活でのつまずきを予測しやすくなる。多面的に学生を理解し支援する手がかりになりうるため、今後の入学時スクリーニングテストは学修面の課題をも汲んだ項目を入れることが必要と考える。質問数に関しては、実施時間のことや近年の心理検査の傾向を踏まえると、60項目より少数の方が適当と考える。また、内容面に関しては、「UPI」と「困り具合に関するセル

フチェックリスト」で重複する項目は割愛して、『困り具合に関するセルフチェックリスト』項目を挿入する形式が妥当と考える。

(1) 困り具合に関するセルフチェックリスト」の質問項目の選定

佐藤ら⁴⁾は、『困り具合に関するセルフチェックリスト』を因子分析したうえで、米山らの先行研究⁵⁾と比較し、2つの研究で同様の因子に負荷した20項目を見出している(表1)。佐藤らの研究では、米山らの研究と比べて、質問項目の文章表記が異なり、より理解しやすい表記になっている。その分、質問項目の文章量が長くなっている項目もある。A4用紙に質問項目を収めることを考えると、文章表記は短い方がよいため、米山らの質問項目を採用する。また、抑うつ・不安因子の質問項目は「UPI」の質問項目と重複するため除外し、計16項目とする。「UPI」の質問項目の選定は脇田らの「UPI」短縮版⁶⁾の項目を採用する。

表1 2つの研究で同様の因子に負荷した項目

	佐藤・衛藤	米山
学習困難因子	聞く人・読む人が分かりやすいような配慮をして、考えを話したり文章にしたりすることが苦手である 手書きで文字を書くのがとても遅い、または文字を上手に書くことができない 講義を聴きながらノートを取ることができない 二つ以上の作業を同時にこなそうとするとすごく混乱する	聞く人・読む人が分かりやすいように考えを整理して話したり、文章にしたりすることが苦手だ 手書きで文字を書くのがとても遅い、または文字を上手に書くことができない 講義を聴きながらノートを取ることができない 二つ以上の作業を同時にこなそうとするとすごく混乱する
対人関係困難因子	納得するまで質問する等、人から「しつこい」とよく言われる 突然カッとなることが多い 衝動的に物を投げたり壊そうとしたりすることがある 周囲の人との会話がかみ合っていないと感じることがある クラスメート等とトラブルになることが多い 人と会話するときに自分の話ばかりをしてしまう 思い込みが激しいとよく人から言われる	納得するまで質問する等、人から「しつこい」とよく言われる カッとしやすい 衝動的に物品を壊すことがある 周囲の人がいっていることをうまく理解していないように感じる クラスメート等とトラブルになることが多い 人と会話することが苦手だ 思い込みが激しいとよく人から言われる
注意・衝動性因子	諸手続きの期日や課題の提出日を忘れてしまうことが多い 掲示物や配布物に気がつかない、もしくは忘れてしまうことが多い 紛失物が多いまたは物をどこに置いたか分からなくなる ぼーっとしていたり他のことに気をとられていたりして講義の時間に遅れることが多い 整理整頓が苦手である	諸手続きの期日を忘れてしまうことが多い 掲示物や配布物に気がつかない、もしくは忘れてしまうことが多い 物忘れ、紛失物が多い 約束した時間に遅れることが多い 整理整頓が苦手だ
抑うつ・不安因子	気分が沈みがちである 自分はダメな人間だと思いがちである 周りから孤立していると感じる 将来のことを考えると不安である	気分が沈みがちである 自分はダメな人間だと思いがちである 周りから孤立していると感じる 将来のことを考えると不安だ

4) 佐藤克敏・衛藤裕司 2009「大学生版発達障害チェックリストにおける項目検討について(研究2) 高等教育機関における発達障害のある学生に対する支援に関する研究—評価の試みと教職員への啓発—(平成19年度—平成20年度)」、国立特別支援教育総合研究所、14-17頁。

5) 米山直樹 2009「大学生版発達障害チェックリストにおける項目検討について(研究1) 高等教育機関における発達障害のある学生に対する支援に関する研究—評価の試みと教職員への啓発—(平成19年度—平成20年度)」、国立特別支援教育総合研究所、17-21頁。

ただし、「23. いらいしやすい」、「24. おこりっばい」の質問項目内容は、『困り具合に関するセルフチェックリスト』の「カッとしやすい」、「衝動的に物品を壊すことがある」と重複するため、除外する。結果、「UPI」短縮版(6)から計18項目採用することとする。文章表記に関しては意味が分かり難いという意見が多かった、「45. とりこし苦労をする」は「どうなるかわからないことをあれこれ心配する」に表記を変える。最終的に、「UPI」と『困り具合に関するセルフチェックリスト』の質問項目を合わせると計34項目となる。項目数が従来の「UPI」に比べて減るため、学生への負担は軽減すると考えられる。また、教示内容に関しては、「UPI」では従来「最近1年の間」の状態の判断が求められていたが、長期スパンにおける判断が難しいと考えられるため、「最近過去30日の間」と短期間のスパンに変更する。聞き取り調査から判明したように判断がテスト時の心身の状態で左右されている傾向が見られたため、従来の「ときどき感じたり、経験したこと」から「よく感じたり、経験したこと」に変更する。「困り具合に関するセルフチェックリスト」に関しては長期的な経験を問うているため、「あてはまる項目に○印を、あてはまらない項目には×印」とする。頻度に関しては、学生の負担や中性カテゴリーの増加を考慮して、従来通りに2件法(○・×)にする。そのテストモデルが以下のようなものになる(図3)。

学生支援チェックテストモデル										平成 年度入学生用	
学 科		性別	学 籍 番 号		ク ラ ス 番 号		氏 名				
a・b c・d		男・女									
★これは、あなたの健康の理解と増進のための自己チェック表です。性格診断ではありません。 番号順によく読んで、あなたが最近30日の間に、ときどき感じたり、経験したことのある項目に○印を、あまり経験していない項目には×印を書いてください。											
質 問 項 目											
1	不平や不満が多い	6	何事も生き生きと感じられない	11	気をまわすすぎる	16	つまらぬ考えがとれない				
2	自分が自分でない感じがする	7	時々声がふるえたりする	12	つきあいが嫌いだ	17	周囲の人が気になって困る				
3	悲観的になる	8	何事もためらいがちである	13	ひけ目を感じる	18	気持ちが傷つけられやすい				
4	気が小さすぎる	9	他人に悪くとられやすい	14	どうなるかわからないことをあれこれ心配する						
5	死にたくなる	10	他人が信じられない	15	くり返し確かめないと苦しい						
★番号順によく読んで、あてはまる項目に○印を、あてはまらない項目には×印を書いてください											
1	聴く人・読む人が分かりやすいように考えを整理して話したり、文章にしたりすることが苦手だ	5	納得するまで質問する等、人から「しつこい」とよく言われる	9	クラスメート等とトラブルになることが多い	13	掲示物や配布物に気がつかない、もしくは忘れてしまうことが多い				
2	手書きで文字を書くのがとても遅い、または文字を上手に書くことができない	6	カッとしやすい	10	人と会話することが苦手だ	14	物忘れ、紛失物が多い				
3	講義を聴きながらノートを取ることができない	7	周囲の人がいっていることをうまく理解していないように感じる	11	思い込みが激しいとよく人から言われる	15	約束した時間に遅れることが多い				
4	二つ以上の作業を同時にこなそうとするとすごく混乱する	8	衝動的に物品を壊すことがある	12	諸手続の期日を忘れてしまうことが多い	16	整理整頓が苦手だ				
この結果について、知りたいですか？ 「はい・いいえ」(どちらかに○印をつけてください) 上記で、「はい」と答えた方は、携帯番号を記入してください。(— —) 「はい」に○印をつけた方は後日連絡します。学生相談室の受付までお越しください。 ※但し、このアンケートに答えたくない方は提出しなくて結構です。また、結果について知りたくない方は無記名でも結構です。 ※この用紙に書かれた内容は、個人情報保護法に基づき学生相談室で管理いたします。											

図3 学生支援チェックテストモデル版

- 6) 脇田貴文・小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子 2007 「University Personality Inventory 短縮版の開発」『中部大学人文学部研究論集 17』123-128頁。

(2) 高校までの教師の関わり方、教育相談の在り方について

今回の調査結果の主たる目的は高校までの修学状況を踏まえ、大学生活全般において不適応を予防するための支援チェックリストの作成である。加えて、この調査のプロセスから見えてくるものは高校、中学等の教員の生徒への関わり方である。ヒアリングの内容にもあるように、ある学生は小学校時代の教師の関わり方がそれ以降の学校不適応への発端となっている。一般的に学校への不適応は不登校というかたちで現れていることが多いが、教師側の関わり方と生徒のニーズの間のずれから身体上の不調を訴えたり、登校しぶりを始めるケースもヒアリングの過程で聞かれた。ただ、このようなヒアリングを通じて感じる懸念は、小、中、高校時代、心理的課題も含めて、修学上の漠とした困り感を、多くの生徒が適宜、教師や親に伝えきれていなかった、ということである。例えば、温厚でおとなしい一見適応的に振る舞っている生徒は目につくような問題行動を起こさないため、周囲から見ると目立たなく、手のかからない者としてみなされることが多い。しかし、実際の学校生活では、不注意により忘れ物が頻繁にあったり、教師の指示を具体的に理解できず、どのような行動をとるべきかが分からず、本人は困り感を持っている。このような場合、言語能力や社会的スキルをある程度保持していれば困り感を周囲の教師に伝えることができるが、そうでない場合はそのまま見過ごされてしまう。見過ごされたまま、本人に対する介入がなされない、本人の発達の課題は未解決なまま残り、時間経過とともに課題は累積されていくことになる。まずは、教師側が児童・生徒の行動を注意深く観察して、子ども達のニーズを把握することが重要となる。そして、児童・生徒に対して共感的に接しながら、社会性のスキルが不足している場合はスキルを段階的に育成していくことが必要となる。

近年、欧米のみならず、本邦においても注目されているフレームワークとして社会性と情動の学習プログラム(Social - Emotion Learning : 以下 SEL)がある⁷⁾。SELは社会的コンピテンスと感情コンピテンスの育成をねらいとした教育プログラムである。具体的には「自己への気づき」、「他者への気づき」、「自己コントロール」、「対人関係」、「責任ある意思決定」と5つの基礎的な社会能力の育成をねらいとしている。SELにはソーシャルスキルトレーニング、アンガーマネジメント、ストレスマネジメントなど含まれ、約80種類のプログラムがある。このようなSELのエッセンスを小、中、高校時代の教育相談場面等で取り入れ、より踏み込んだかわり、支援、理解があると、大学時代での修学上の困り感も低減されるのではないかと考える。高校までの生徒達の修学上の困り感をより早く察知し、積極的に介入していくことの必要性を、今回のヒアリングを通じて強く痛感した。

(3) 結び

今回提示した新しい学生支援チェックリストのモデルは本研究の分析だけでなく、他の研究や経験的な知見から導き出された部分が多い。そのため、信頼性や妥当性の検討、カットオフポイントの設定はさらなるデータ収集が必要であることはいうまでもない。また、新しい学生支援チェックリストの目指すところは従来の心理的な課題を抱えた学生の

7) 山田洋平 2008「社会性と情動の学習 (SEL) の必要性和課題ー日本の学校教育における感情学習プログラムの開発・導入に向けてー」『広島大学大学院教育学研究科紀要57』145-154頁。

チェックや支援だけではなく、発達的な課題を持つことにより大学生生活に困難をきたす可能性が高い学生の支援ができるようになることである。当然のことながらチェックリストに基づくテストの実施はよりよい学生生活を営むために必要な支援を探索するための一つの材料として実施されなければならない。

付記

本稿は大阪商業大学平成26年度研究奨励研究助成費「大学不適應とUPI（大学生精神健康スクリーニングテスト）得点との関連性に関する一考察」による研究成果の一部である。

参考文献

- 青木智子・佐藤笙子 2013「UPI の結果から見た学生支援の在り方－A大学のケースを考える」『平成国際大学論集18』157－172頁。
- 泉水紀彦・茅野理恵・佐野司 2012「UPI からみた大学生の入学後のメンタルヘルスの変化」『筑波学院大学紀要 7』197－208頁。
- 岡伊織・吉村麻奈美・山崖俊子 2015「津田塾大学新生における精神的健康度の変化－43年間にわたる大学生精神医学的チェックリスト（UPI）の結果より－」『津田大学紀要47』175－195頁。
- 願興寺礼子・小塩真司・桐山雅子 2007「中部大学新生の心理的健康の年次的変化－UPI の得点、健康や精神衛生上の問題・治療歴の有無、悩みの有無、内容について－」『中部大学教育研究 7』63－68頁。
- 国立特別支援教育総合研究 2009「高等教育機関における発達障害のある学生に対する支援に関する研究－評価の試みと教職員への啓発－（平成19年度－平成20年度）」国立特別支援教育総合研究所。
- 酒井渉・野口裕之 2015「大学生を対象とした精神的健康度調査の共通尺度化による比較検討」『教育心理学研究 63』111－120頁。
- 高岸幸弘・櫻井興平・橋根千尋・菅野絵里子・安東大起 2013「入学時の学生精神的健康検査（UPI）と授業の出席状況との関連」『関西国際大学研究紀要14』177－184頁。
- 中井大介・茅野理恵・佐野司 2007「UPI から見た大学生のメンタルヘルスの実態」『筑波学院大学紀要 2』150－173頁。
- 中川正俊・荒木乳根子・平啓子 2006「UPI（大学精神健康調査）とその後の心理的問題の発生および学業遂行との関連性に関する研究」『田園調布学園大学紀要 1』51－67頁。
- 西山温美・笹野友寿 2004「大学生の精神健康に関する実態調査」『川崎医療福祉学会誌 14(1)』183－187頁。
- 前垣綾子・滋野和恵 2011「UPI による大学生の精神的健康の実態」『北海道文教大学研究紀要 35』115－126頁。
- 渡辺由己・宗野恵子 2011「UPI の特徴から見た大学新生の精神的健康に関する研究」『吉備国際大学臨床心理相談研究所紀要 8』27－38頁。
- 山田茂人 2010「ストレス反応の男女差」『精神神経学雑誌112(5)』506－520頁。

- 吉武光世 1995 「UPI からみた新入生の心の健康状態について－他大学との比較をとおして－」
『東洋女子短期大学紀要27』 33－42頁。
- 渡辺由己・宗野恵子 2011 「UPI の特徴から見た大学新入生の精神的健康に関する研究」『吉備国
際大学臨床心理相談研究所紀要8』 27－38頁。